

不定愁訴に対する診断支援アルゴリズムの開発

近年、更年期の女性の主訴は不定愁訴とされやすいことが問題となっている。不定愁訴は、何となく体調が悪いという程度の漠然とした自覚症状を訴える人が医療機関を受診しても、身体の不調や不快感につながる明らかな病変が見つからない状態のことである。2007~2008年の東京女子医大女性専門外来の他科で不定愁と受診した者の原因疾患内訳では、27%が甲状腺機能低下症、亢進症、副腎皮質機能低下症、白血病、悪性リンパ腫、悪性脳腫瘍などの器質的疾患であった。

今回の研究は日本医療研究開発機構(AMED)が主体となり、複数の大学で研究開発を分担して行っている。東京女子医大女性専門外来では、多彩な13分野の女性専門医が連携しており、女性専門外来として担当医数、患者数共に国内で最大規模である。また不定愁訴の識別診断を行った10年間の豊富な診断データ(5241名、61983件分)を蓄積している。今回のプロジェクトではこの女性包括医療10年間の実臨床データの中から、主訴の組み合わせ、決め手となった検査、最終診断などを抽出、統計解析し、エビデンスと実臨床経験に基づく診断支援アルゴリズムを実装する。